

Back Number

本論文は

# 世界経済評論 2021年9/10月号

(2021年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

## 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

## 後藤新平の台湾 ：人類もまた生物の一つなり

拓殖大学教授 佐藤 幸志



[著者] 渡辺利夫 (わたなべ としお)

拓殖大学前総長

[発行] 中央公論新社, 2021年1月

[判型] 四六判, 256ページ

[定価] 本体 1600円+税

時代は明治、日清戦争に勝利した日本は初の海外領土、台湾を手にした。そして、その発展の礎を築いたのが、第4代台湾総督・児玉源太郎と共に、同民政長官に着任した後藤新平である。本書では、後藤と同じく拓殖大学総長・学長を務め、開発経済学の泰斗でもある筆者により、後藤の人生に重ね合わせる形で、当時の台湾統治・開発が丹念に描かれている。

アヘン吸引、疫病、土着の匪賊など、当時の台湾は多くの問題を抱えており、もともと領土としていた清国にとっても「化外の地」、児玉の総督就任まで日本の台湾統治は難航していた。傑出した戦略家・児玉に、知見と才能を認められた後藤は、その台湾で手腕を存分に発揮

する。本書の副題にも現れているが、後藤は社会進化論ベースの持論「生物学の原理」に基づき、現地を詳細に調査・分析した上で、ユニークかつ柔軟な施策を打ち出し、統治・開発を進めていく。後年、日本の台湾統治は欧米からも高く評価されることとなる。

その台湾開発人材の育成を目的として1900年に創立されたのが、現在の拓殖大学であり、関連する資料・文献が豊富に蓄積されている。これらを活かし、筆者は明治期を中心に当時の日本や台湾統治・開発に関する文献をこれまでも複数執筆している。

「はしがき」で筆者自身が述べているように、形式的には本書は学術書でなく小説である。しかし、豊富な参考資料・文献、類似テーマでの筆者の蓄積、そして優れた学者がもつ考察・推論力により、単なる読み物としての小説の域を超えている。学術的には筆者が今後、開拓の意義を認める比較植民地史分野の事例文献と位置付けられるかもしれないが、同時に本書は、読者にさまざまなインスピレーションや想いを惹き起こす。学術的には開発経済学や国際政治、安全保障はもちろん、経営学など多様な分野に対しさまざまな示唆を与えうる。自分のような国際ビジネス研究者であれば、新興国市場戦略や本社・海外子会社関係の議論に通じるものを見出せよう。また本書の小説的側面でもある、開拓者たちの生き様に多くの人が胸を熱くするのであろうが、なかには、最大の理解者であった児玉を喪い、出世街道にありながらも思うように手腕を発揮できなかった後半生の後藤に、自分の姿を重ねる人もいるかもしれない。

本書は中身が分からない引出しを数多くもつキャビネットのようであり、どの引出しを開けるのか、そこになにを発見するかは読み手次第である。

(さとう こうじ)